

=====
GCOE NewsLetter
[No.28 2010/1/27]

2009年度第2回gCOE論文賞の募集について
次回のオープンレクチャーについて
「テキスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約
gCOE講演会（フォーエーカー教授）の要約
第24回オープンレクチャーの要約
グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約
gCOEスタッフ海外出張報告
=====

■ 2009年度第2回gCOE論文賞の募集について

グローバルCOEでは論文を募り、「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2010年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。

応募の受付期間は2010年2月18日（木）～2月26日（金）です。

応募方法について詳しくは下記URLからグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご覧ください。

http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/20091coe_2/

■ 次回のオープンレクチャーについて

2010年2月10日（水）18:00～ 名古屋国際センタービル15F GCOEオフィス
講演者：ローラン・ビバル教授（エセック経済商科大学院大学、通称ESSEC）
題目：「歴史の終わりの問題性について」
使用言語：フランス語（通訳あり）

■ 「テキスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

松澤和宏（2010年1月7～10日）

テキスト布置の解釈学を素描するにあたって、まず最初に21世紀COEプログラムの統合テキスト科学の探究のなかからこの解釈学が誕生した経緯について振り返った。ヤコブソンの有名なコミュニケーション図式におけるメッセージやコードとい

った概念の批判的検討を通して、テキスト布置という重層的な構造やコミュニケーションの主体が文化的コンテキストのなかに身を置いているだけではなく、そもそも主体として存在するためには、諸々の〈先入見〉にあらかじめ先導されていること、さらにテキストの還元不可能な二重性をガダマー的〈対話〉論の紹介やバルトやデリダのテキスト論の批判的吟味を通して明らかにした。ついで、ガダマーが自然科学の機械論的パラダイムに教養や共通感覚、趣味判断などの人文主義的伝統を対置することを通して、解釈学を錬磨していった歴史的意義を確認した。講義の後半では、権威と理性、先入見とイデオロギー、伝統と近代主義との関係についても様々な角度から検討を加えた。出席した院生諸君と実り豊かな〈対話〉が成立したことを嬉しく思う。

■ gCOE講演会（フォーエーカー教授）の要約

講演者：ポール・フォーエーカー教授（マンチェスター大学歴史学部長）
題目：『ウィルフリッド伝』にみる、ウィルフリッドによる大陸の記述。われわれはそれを信じるか（The 'Life of St Willfrid's' account of Wilfrid on the Continent. Should we believe it?）

日時：2010年1月20日(水) 午後1時30分～3時30分

場所：文学研究科大会議室

1953年生まれのポール・フォーエーカー教授は、オックスフォード大学を卒業後、ロンドン大学で博士号を取得し、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ講師職を経て、現在マンチェスター大学の歴史学部長職にある。共著に『後期メロヴィング期フランス 歴史と聖人伝』（1996年）、単著に『カール・マルテルの時代』（2000年）、編著に『新ケンブリッジ版中世史』第1巻（2005年）がある。いまや英語圏におけるメロヴィング朝研究をリードする人物である。

講演の題目は、「『ウィルフリッド伝』にみる、ウィルフリッドによる大陸の記述。われわれはそれを信じるか」である。イングランド出身のウィルフリッドは、ノーサンブリアの司教にしてリポン修道院長であった。709年に彼がこの世を去った後、ほどなくまとめられた『ウィルフリッド伝』は、ウィルフリッドの三度にわたるローマ訪問を記録しているという点で、メロヴィング朝研究には欠かせない史料である。しかしながら、聖人伝という史料の性格上、そこに記された記述で語られる歴史的事実は、慎重に検討したうえで利用しなければならない。フォーエーカー教授は、『ウィルフリッド伝』とは別の経路で同時代の情報を収集した大陸側の史料、『アウネムンドの事績』の記述内容と比較することにより、『ウィルフリッド伝』の記述の真偽を問うた。

講演は、テキスト伝承や発掘記録も含めた最新のメロヴィング朝研究の一端であり、極めて専門性の高い内容であった。それは文献学的また歴史学的に意義深いもので

あると同時に、本プログラムの主幹テーマたるテキスト論にも裨益するところの大きい議論であった。

(文責・小澤 実)

■ 第24回オープンレクチャーの要約

2010年1月13日(水) 18:00~19:00 名古屋国際センタービル15F GCOEオフィス
講演者：ゴーベル・ゼーン 准教授(名古屋大学大学院文学研究科・言語学)
題目：「インドネシアのテレビ放送に見る記号、再帰性、真の民族人格性」

オープンレクチャーでは、言語人類学とメディア研究における互いに関連した4つの流れに依拠して、インドネシア人のある集団がどのようにしてインドネシアのテレビドラマに関わりを持ち始めるのかを検証した。特に理論的に関係するのは、記号論に関するAsif Aghaの研究、それを時間的尺度と結び付けて用いたStanton Wortham、アイデンティティと「間主観性の駆け引き」についてのMary BucholtzとKira Hallの研究である。ここでは、2つの視聴セッションと視聴後の5人のインドネシア人からなる集団に対するインタビューを記録した音声・映像データに焦点を置いている。これらのセッションは2週間の期間にわたって実施されたものである。データの分析において、私はセッション中に行われた会話が持つ2つの興味深い特徴を強調した。第1に、再帰的な会話あるいはAghaの言う「メタ記号的論評」を通して、参加者が表象された記号の使用を認証し、脱順応化する(Bucholtz & Hall (2004)参照)上で、どのように広く流布する民族的アイデンティティの記号を認識する能力を用いているかを示した。第2に、それらの論評が参加者自身の社会的同定においてどのように重要性を担うかを示した。この際特に、あるメンバーの論評が自身のスンダ語母語話者としてのアイデンティティを時間・空間を通して凝集させる上で持つ重要な意味を取り上げた。それはある意味で、母語話者に対する彼女自身の位置付けと、テレビドラマに見られる人物のそれとを認証するものである。同じく重要なことは、その正しさまたは欠如についてこれらの論評を行う他の何人かは、論評の対象となる民族集団の成員として分類され得ないことである。確かに、自分たちがスンダ語を解さずその能力も無いとそのうち一人が明示的に述べているが、にもかかわらず、彼らは続いてスンダ人の民族性の記号に対する理解力を、それを認証し脱順応化することで示している。

引用文献

Agha, Asif. 2007. *Language and Social Relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
Bucholtz, Mary, and Kira Hall. 2004. *Language and Identity*. In Alessandro Duranti (ed.) *A Companion to Linguistic Anthropology*. Oxford, UK: Blackwell. 369-94.
Wortham, Stanton. 2006. *Learning Identity: The Joint Emergence of Social Identification and Academic Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

■ グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

第18回ブリーフィング（2009年12月16日）

内田智秀「ベルギーは文学にいかなる影響をおよぼしたか—国民と民族の狭間で—」

本ブリーフィングでは、創作活動が本格化する前にメーテルランクが文学、絵画について記した『青いノート』を19世紀ベルギーの歴史コンテクストに照らして考察した。独立から半世紀しか経っていない歴史の浅いベルギーでは、フランス文学との関係で、ベルギー独自の文学を目指そうと、多くの作家がフランデレン地域色の強い題材を用いて創作していた。このようなコンテクストの中でメーテルランクも国家で分けず、「ゲルマン的性質(Germanisme)」、「ラテン的性質(Latinisme)」と独自の民族的視点で、文学、絵画を考察している。彼はベルギーをフランデレン地域やドイツと同じゲルマン的性質を有する国家とし、ゲルマン民族特有の物質と交感できる点を強調し、ラテン的性質を有するフランスとの違いを示した。さらにイギリス、アメリカの芸術もゲルマン的性質を有するとし、自然や魂との交感に彼は注目した。この民族的視点による芸術論は、その後のメーテルランクの文学、哲学の基調をなす。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

重見晋也（gCOE技術統括責任者・電子テキスト学）

1月14日より1月17日迄の期間、フランス、エクサン＝プロヴァンスのプロヴァンス大学を訪問し、平成22年度と平成23年度の2回にわたってプロヴァンス大学と文学研究科GCOEプログラムの共催で開催する予定になっている国際研究集会の内プロヴァンス大学で開催する国際研究集会について、その概要や開催期間の打合せをプロヴァンス大学にて行った。今回の国際研究集会は、プロヴァンス大学のフランス文学研究グループであるCIELAM (Centre interdisciplinaire d'Etude des litteratures, Aix-Marseille)とGCOEとの共同研究として位置づけることができる。

打合せには、プロヴァンス大学から、博士後期課程主任のジャン＝レイモン・ファンロー教授、プロヴァンス大学フランス文学研究グループ責任者のシャンタル・コノキ＝ブルニュ教授、国際研究集会開催責任者のクロード・ペレス教授、ヴァンサン・ヴィヴェス准教授の4名に同大学国際交流担当副総長のジャン・ヴィヴィエス教授を加えて行い、国際研究集会の内容、規模、期日、プロシーディングの刊行などについて議論した。

平成22年度に計画している国際研究集会については、プロヴァンス大学がフランス

以外のヨーロッパの大学と締結しているLEA-Europe, およびトゥールーズ大学の研究グループPLH (Patrimoine, Litterature, Histoire)など, 総勢18名程度の発表者が3日間にわたってフランス文学を対象として「現代における文学」をテーマにすることを確認した。また開催にあたっては, フランス国内の文学研究オンラインサイトであるFabulaにも協力を要請することを確認した。加えて, 博士課程後期課程学生あるいはポストクの参加を積極的に促すことも確認した。GCOEからは, 文学研究におけるテキスト布置解釈学の意義と重要性に関わる発表を行う予定である。開催期間は現在のところ決定していないが, 2011年1月以降に行うこととし, 早急に日程の調整を行うことを確認し, プロシーディングスについてもプロヴァンス大学出版局から発行することを予定している。

次回のメール版NewsLetterの発行は2010年2月中旬 を予定しています。

.....

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.28

発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2010 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

.....